

学校図書館から絵本で和食文化推進！

朝日 仁美

子どもたちから「和食ってなあに？」と聞かれたらなんと答えますか？多くの人は分かっているが、何て言っているのやら・・・という状況ではないでしょうか？今回そんな状況を打破するために、また学校図書館から「和食文化」について発信するための提案をしていきたいと思えます。

私は学校司書として勤めながら、絵本専門士という肩書きでSDGsの普及活動をしています。一人一人がSDGsへの理解を深め自分ごとにして行動できるように、絵本を活用した講座を開催してきました。実は「和食」は、SDGsの考え方に適った食文化であるといわれています。そんな和食文化に幼児から大人までみんなが慣れ親しみ、もっと身近に生活に取り入れることを、絵本を使って提案したいと考えました。この取り組みを行うにあたり、農林水産省が主催している「和食文化継承リーダー研修」に参加しました。これは子どもたちや子育て世代に対して、和食文化を伝える中核の人材を全国に育成するために実施されている講座です。農林水産省では現在「楽し味(み)プロジェクト」と題し、認定されたリーダーや大学・企業などを巻き込んで、和食文化を推進しています。国を挙げてのプロジェクトの一環として、学校図書館×和食文化推進×SDGsの観点から皆さんの学校図書館を活性化するヒントに少しでもなれば嬉しいです。

さて最初の質問の答えを考えていきたいと思えます。学校図書館の資料を活用して「和食」を調べてみましょう。図書館には国語辞典や百科事典があります。これらを引いて和食の定義を確認したいと思えます。

<和食> 日本の気候、風土、文化から生まれた

料理。日本食、日本料理ともいい、中国料理や西洋料理などに対し、日本の伝統的な料理をさす。

(ポプラディア第三版16巻/ポプラ社)

と明記されています。この定義さえしっかり押さえておけば、誰にでも正しく同じように和食の説明ができます。外国語に訳せば世界各国の人々にも説明できるのです。

説明できるようになったら、次はもっと身近に感じてもらうために和食文化に関連する絵本を紹介していきましょう。日頃、食しているうどん・そばに寿司やおにぎりが出てくる絵本はたくさんあります。四季折々の行事食に関する絵本も出版されています。例えばお正月のおせち料理がテーマの絵本『おせち』(内田有美文・絵/満留邦子 料理/三浦康子 監修/福音館書店/2024)があります。最初は雑誌として出版され、その後上製本化、昨年には英語版も発売され大変話題になりました。

恵方巻きやちらし寿司、お月見団子を作るお話の絵本にはレシピが掲載されている楽しい作品もあります。

伝統食以外でも、日本独自のカレーライスやどんぶり物も人気絵本のテーマになっています。『にっぽんのおかず』(白央篤司 著/片桐圭 写/理論社/2016)は、日本各地の食文化を写真で紹介し、「おにぎり」「おやつ」とシリーズ化されています。お箸の持ち方や、鰹節や豆腐は何からどうやって作るのかが分かる写真絵本も和食文化の本と言えるでしょう。

このように考えると蔵書を使って、和食文化を紹介することはそんなに難しいことではないのです。もしこのような本が無い場合は地域の公共図書館の協力を得て揃えてみてください。そして栄養教諭などと一緒に今年度の給食週間や11月24日の和食の日に関し和食文化を発信してみるのはいかがでしょうか？日本の文化を世界に伝えていく人が少しでも増えることを期待しています。

(あさひ ひとみ：和食文化継承リーダー/
絵本専門士/糸魚川市学校司書)

わからない

出口 綾子

どの棚に置く？

大西暢夫さんの写真絵本『やさしいカタチ』は、もし皆さんが本を手にとって下さっても、表紙からは何の本だかわからないだろうなあ、と思います。そもそもタイトルが何のことだかわからないし、表紙写真からも、タイトルとの結びつきがわからないでしょう。

私が普段作っているような人文社会の本では、ふつう、こういうメインタイトルを付けたら、サブタイトルや帯を駆使して、具体的なこと、伝えたいことをハッキリと表現しますが、この本では帯も付けずに、あえて説明的なことをいっさいしませんでした。なぜこんなふうにしたかという、この本のテーマが「わからない」であることと関連があります。

しかし、いくら本の趣旨としてそのことが適切だったとしても、編集担当としては、けっこう不安でした。ふつうは、手に取った時に何の本かわからないなんて、営業的にあり得ないからです。図書館員の皆さんも、これはどの棚に入れればいいのか、迷われたかもしれません。

「人間って不思議だ」

本を手にしてページをめくると、まず、見たことがない形だけれどもやたらと美しい色彩の乗り物が、目に飛び込んできます。大西さんが初めてこれらを目にした時、「なんだこれ!？」と思ったことを読者に追体験してほしいので、できるだけ冒頭からの説明を避けました。

この乗り物の名前をどこにどう出すかも、大西さん、デザインの鈴木康彦さん、私の3人で最後まで議論しました。

さらにページをめくると、ゴロンと床の敷物に寝そべっている人たちが出てきて、この姿に大西さんは戸惑います。この姿勢が、この方たちの本来の姿だというのですから。

生まれつき見えない・話せない・聞こえない・

立てない・座れない・食べられないなど、重度の障害を持った方たちと私たちは、ほぼ、直接会う機会がありません。さっきの不思議な乗り物はこの方たちが使うものなので、なるほど、見たことがないわけです。本の刊行後に、大人の読者の方たちから、「こんな乗り物があるなんて知らなかった。初めて見た」との感想も頂いています。



彩流社

ISBN : 9784779130564

出版年月日 : 2025/07/10

B5・56ページ

2,420円(税込)

そんな彼らとふれあった大西さんやスタッフたちは、本のなかで、「わからない」を連発します。

生まれてからずっと、見えているし聞こえているし話せるし歩けるぼく(大西さん)に、「その感覚は、わかるはずもなかった」。

「彼らがどこまでわかってきているのかが、わからないのです」とスタッフ。

「いつも体調のことを気にしながら声をかけていますが、その答えが返ってくるわけではありません。だから、わからないのです」。

理学療法士の沼田さんは、「どうして、涙が出てしまうんだろうね。悲しいのかな？それとも

どこか痛いのかな」「幼いころから知っていても、やっぱりわからないことが多い。人間って不思議だ。さらに沼田さんは、自分が勉強してきたリハビリとは、不自由になった手や足などを、元の機能に近づけていくことだと学んできたが、彼らに関わっていると、「リハビリとは、ということなのか、原点に戻ることがあります」と言います。

この「わからない」は、関わらないことや無関心からくる「知らない」とは対極にある言葉で、わかろうとする不断の試みと愛情の結果に出てくるものであることが伝わってきます。

「わかる」と言い切ってしまうことは、危うさのある態度でもあり、その認識でトンチンカンな「解決」に向かうこともあるでしょう。

そして、だけれども、「わからない」と言い続けられないのが、この姿勢保持装置とよばれる乗り物です。ひとつの答えとして、この世に一つだけの、その人だけの乗り物を作りださねばならないのです。

こんな大人に、なりたくない

大人たちがこんなに「わからない」と言うこ

とが、正解を求められる教育を受けている子どもたちには新鮮かもしれないし、障害のある方をじっと観察して乗り物を設計して作る職人や理学療法士、生活をケアするスタッフなどの姿も、この本で初めて知る子どもが多いでしょう。とくに職人の森田寅さんの仕事は、ふだんオモテに出てくることがほとんどありません。「いまどき」はマニュアルがないと仕事ができないという人が多いそうですが、この現場には、マニュアルはなさそうです。

「世の中にはこんなにすてきな仕事があるんだ。おもしろそう。将来やってみたいな」なんて感じてもらえたら、とても嬉しいです。

「かわいそうな人を助けましょう」とか「差別はいけません」というような、うわべの、結論を押し付けるような陳腐な言葉ではなく、不思議だ、初めて見た、大変そうだ、わからない、というところから入り、本を通して力いっぱい生きている彼らの姿に出会って、毎日こういう感じなのか、一生懸命なんだな…など、何かしらの発見をする人が、大人でも子どもでもいてくれたらな、と思います。

(でぐち あやこ:彩流社)



この乗り物は、
どんなふうに使うのだろう？



わからないからこそ、家族の
ように関わりを深めていきます



森田寅さんはじっと観察し、
悩みながら姿勢保持装置を作る

多様な子どもたちの学びを支える学校図書館

八ヶ代 有美子

多文化共生が日常となっている学校で

「先生、なにじん？」本校に学校司書として異動して間もなく、図書館に来た子どもからかけられた言葉です。「先生は日本人だよ。」と答えながら、この問いかけに、本校の日常をあらためて実感しました。本校は、6割を超える児童が外国にルーツを持っている国際色豊かな小学校です。今年度は創立120周年を迎え、親子2代、3代にわたって通学している家庭もあります。長い歴史の中で地域に溶け込み歩んできた学校に、現在は多様な文化や言語を背景にもつ子どもたちが集い、同じ教室で共に学んでいます。ここでは「多文化共生」という言葉が特別な取り組みではなく、学校生活そのものとして日常的に存在しています。

子どもたちが大好きな学校図書館

休み時間になると次々と子どもたちがやって来ます。校舎2階、3年生と4年生の教室の間にあり、立地にも恵まれています。静かに本を読む子ども、友だちと一緒に本を楽しむ子ども、教室とは別の場所で過ごすために来る子どもなど、過ごし方はさまざまです。私自身も朝は図書館に入り、静かな館内を見回して一息入れてから一日をスタートします。「図書館に来るとホッとする」という子どもの声に、「わかるよ。先生も！」と応えます。

授業時間の利用では、低学年から中学年は週に1回程度図書館で過ごすことが多く、高学年も忙しい学校生活の中で、担任教諭ができるだけ図書時間を確保しています。個別級の子どもたちは週に3回割り当ての時間があります。子どもたちが図書館で過ごす価値を担任教諭が理解していることは、とても意味のあることだ

と感じています。特に1年生への読み聞かせは、絵本を通して子どもたちと心が通じ合う私にとって幸せな時間です。

蔵書は、赤ちゃん絵本から、子どもたちのリクエストによる一般書まで幅広く揃えています。多言語環境の子どもたちも楽しめるよう、文字量の少ない本や視覚的に楽しめる本、外国語の図書も少しずつ増やしてきました。現在冊数は多くはありませんが、中国語、韓国語、英語、タガログ語、タイ語、ネパール語、フランス語、ドイツ語などの本があります。日本語と外国語が併記されたマッチング絵本や、同じ物語の日本語版と外国語版を揃えています。母国語の本を手に取り、ほっとした表情を見せる子

どもたちの姿を見ることがあります。



授業支援では、教科書の単元に合わせた図書提供を行っています。関連図書をブックトラックに並べ教室前に置きます。これまで作成してきた展示用サインを活用し、すぐに

本を集めてサインをペタッと貼ってガラガラとブックトラックを押していきます。最近は「こどものための読み放題型電子図書館Yomokka! (よもっか!）」の紹介や関連図書の一部を撮影してタブレットに保存し合わせて提供することもあります。

図書の提供はタイミングが重要！「読みたい」と思ったその時に子どもたちの近くに本があることを大切にしています。提供後に教室をのぞき子どもたちが本を手取る様子を見る時が、私にとって嬉しいひとときです。

学校司書としての何よりの喜びは、子どもたちと直接関わることです。図書委員の活動や、夏に多言語で読み聞かせをする国際読書会、秋の読書週間イベントなどを通して、子どもたちの姿から多くのことを学んでいます。

読書バリアフリーをめざして

調べ学習や読書活動の中では、言葉の理解に時間がかかる子どもや、文字を読むことに苦手さを感じる子どもなど、さまざまな学びのつまずきが見られます。そこで、読み書きに困難のある子どもや日本語学習中の子どもも含め、誰もが読書を楽しめるよう「りんごのたな」を設置しています。点字図書、大活字本、LLブック、布絵本、字のない本などを展示した「りんごのたな」は、子どもたちに人気の棚です。

また、本市で導入されたYomokka!は、約5,000冊以上の本が読めます。読書のきっかけづ



くりに加え、読み上げ機能や文字拡大などの補助機能によって、読書のバリアフリーを広げる役割を果たしていることが、子どもたちへの読書アンケートでわかり驚きました。

小学校入学前と卒業後の子どもたちともつながりを

幼保小連携事業の一環として、近隣の保育園や幼稚園の年長児が学校図書館を訪れる取り組みも行っています。読み聞かせの後、図書館でしばらく過ごし1年生の教室を見学します。また、図書委員の児童が園に出向いて読み聞かせを行うこともあります。入学前から学校と本に親しむことで、入学後に「保育園の時に来たよ」と嬉しそうに図書館を訪れる子どももいます。

同ブロック中学校学校司書、近隣小学校学校

司書と連携し、年に4回学校司書連携会議を開催しています。そこでは中学校司書と小学校卒業後の子どもたちの学びと情報を共有しています。

学び続ける学校司書という仕事

学校司書になってから10年余り、ずっと学びの連続です。公共図書館司書として勤務していた経験はありましたが、学校図書館は教育課程に即し、特定の利用者である子どもたちに向き合う言わば専門図書館であり、戸惑うことも多くありました。そのため、教育委員会の研修に加え有志の学校司書による勉強会にも参加しています。勉強会のテーマは、ブッククラブ、アニメーション、読書バリアフリー、新聞の利用方法など実践に即したものばかりです。また、LINEグループでの情報交換なども貴重で、熱意ある仲間や悩みを打ち明けられる仲間の存在は大きな心の支えです。

また最近では、教職員向けの勉強会にも参加し、ディスレクシアや読み書きの困難について理解を深める取り組みにも関わっています。読書は文字を読むことだけではないことを改めて学んでいます。また、学校司書と教職員が共に学ぶことで、子どもたちへの支援がより効果的になっていると感じています。

これからも、人とつながる

学校司書の仕事は一人では成り立ちません。学校教育目標に沿って子どもたちの育ちを支えるため、必ず誰かとつながり、思いを共有しながら進めていく必要があります。教職員や地域の方とコミュニケーションを重ねる中、子どもたちの思いもよらない発想や成長に出会えることがあります。多様な背景や学び方をもつ子どもたちが集う学校で、学校図書館は誰にとっても安心して立ち寄れる場所でありたいと願っています。子ども一人ひとりと本をつなぐ試行錯誤を、これからも続けていきたいと思えます。

(やかしろ ゆみこ：横浜市小学校学校司書)

株式会社 三善

2026年度 英語名作ライブラリー

洋書絵本
セット紹介の
WEBサイトは
こちらから



eigo-meisaku.com

英語名作ライブラリー



〒167-0032 東京都杉並区天沼2-2-3

TEL : 03-3398-9163 FAX : 03-3398-9170

カラー挿絵たっぷりで **ワクワク** 読める

チュウチュウ
冒険団 シリーズ

- ① 冒険のはじまり
- ② ひみつの海チュウ宮殿
- ③ はかせのあぶないロケット
- ④ なぞのゆうれい船



ゆうかななエズミたちの冒険を描いた、
英国で大人気の児童文学シリーズ

フィリップ・リーヴ作 サラ・マッキンタイア絵 綿谷志穂訳
●各定価1760円(税込) © Sarah McIntyre



徳間書店 〒141-8202 東京都品川区上大崎3-1-1 目黒セントラルスクエア
TEL.049-293-5521(受付センター) https://www.tokuma.jp/kodomonohon/

まどろっこしく、しぶとく、
しかし愉快地に。

中高生のための 人生論ノート



小川仁志著

*四六判美装カバー-232頁 1760円

時代を超えて愛される、三木清
『人生論ノート』へのオマージュを
込め、自身の半生を振り返りつつ、
今一番伝えたいことを大いに語る。



ミネルヴァ書房 京都市山科区日ノ岡堤谷町 1
TEL075-581-0296 ※価格税込

広い世界の芸術にふれる全3冊!

美術にふれる絵本セット

ハリエット・ヴァン・レーク / ワウター・ヴァン・レーク 作
野坂悦子 / 訳 ●A4変 / 平均26頁 / 定価: 本体4,400円 + 税



モンドリアン / ヒルマ・アフ・クリント / エゴン・シーレ

朔北社 〒191-0041 東京都日野市南平 5-28-1-1F
TEL042-506-5350 http://www.sakuhokusha.co.jp

これで安心 小学校まるわかり図鑑 入学準備パーフェクトガイド

小学校の情報や友だち関係、生活のことを、
写真やイラストと共に楽しく紹介。



学校、各教科、放課後のすごしかた、
友達との関係の築き方、安全など、
小学1年生が知っておきたいことを
全網羅! ひらがなで分かち書きだから、
子ども自身が読むことができます。

監修: 安藤浩太
定価3,190円(本体2,900円+税10%)
NDC376 / B5変型判 / 304頁
ISBN978-4-02-333478-6

朝日新聞出版

